

道元の言語宇宙

寺田 透

寺田透

運元の言語宇宙

岩波書店

道アのこも宇由

昭和十九年一月二十五日 第一刷発行
昭和五十年四月一日 第二刷発行

元価千八百円

著者 寺田透とあへ

発行所 岩波雄二郎

東京市千代田区一ノ橋二丁目五番五号
発行所 株式会社 岩波書店

糸通印刷・青い装本

著丁本・乱丁本は取替いたします

前書き

去年の秋東京と大阪でやった正法眼蔵「龍吟」「画餅」の講読と、一昨年春全国大学国語国文学会でやった講演「正法眼蔵の用語法」をのぞけば、ここに収めたのが、僕がこれまで正法眼蔵とそれに関係することがらを主題として発表したもののすべてである。

今言った二つのうち前者は、多少の伝記的論及を含むが、速記録もまだ見ていないのだから論外だし、後者は講演のあとで僕に渡された要旨録（「国語国文学」一九七二年十月号所掲）が、語句の運びをきわめて詳細忠実に追いながら、やはり要旨であるには変りがないため、どう手を入れてみても自分の文章になりきれない上、格別新しいことも言っていないから、結局捨てることにした。もともとその内容の一部の、よそでは言っていないなかった事柄は、とり出して最終章「相逢」の中に挿入してある。

その他、講演速記を三篇も含むので、こんど纏めて読みかえしてみると、論旨にも例証の挙げ方にも、あちこち少しづつ重複があるのが分った。そういう個所には出来るだけ添削を加えて、例証など挿しかえるようにしたが、そしてそのため印刷上多きに厄介をかけることになったが、それで

もやはり、視点を変えながら取り上げた同一論点を一回だけに絞るわけにはいかず、重複か何箇所か残ってしまった。しかしこれは、見方が少しつつ変っているという理由から、勘弁してもらいたいと思う。

なお、「中世法語の文字性」は講演後に自分で書いた自分の講演要旨であって、速記ではない。他の講演記録は速記か、繰返し手を加えてきたものなので、講演体書きおろしと言うのか適切たろう。

各篇成立の事情などは、僕か癖でよくやるそれこれの本文中における執筆動機の説明と、編集部が作ってくれる筈の初出一覧で、大体明瞭と思われるからここでは触れない。

最後に、本書に於ける「眼蔵」からの引用は上として寺田透・水野弥穂子校、日本思想大系「道元」に基き、同書上下それぞれ発行以前のもは、衛藤即応校、山岩波文庫版「正法眼蔵」によったことを明らかにしておきたい。

一九七四年三月二十七日

著 者

目次

前書き

第一部

I	透体脱落	二
II	正法眼蔵透脱以後	元
III	短章二篇	空
IV	『正法眼蔵』の思惟の構造	六
V	道元における分裂	一六
VI	『正法眼蔵』の哲学	二四

第二部

I	道元の思想的態度	二五六
II	日本人の思想的態度——正法眼蔵の場合——	二六九
III	正法眼蔵都機講読	三五五
IV	眼蔵参究の傍	四四〇

第三部

I	中世法語の文学性——道元と一遍——	四四八
II	文学のひろばで	四六五
III	注釈後語	四七一
IV	相逢——ランポー・道元など——	四八〇

第一部

I 透体脱落

『正法眼蔵』について僕に何が書けるというのだろう。これについて何か書くように言われ、うかうか引きうけてから十五ヶ月の月日がたった。その間、僕は随分多くの他にやればやれたであろうしごとの時間を、この書物の再読三読のために割いたように思うが、さりとて僕のこの書物に対する理解の程度がその頃に比べて目立って深まったとは思われない。多くの観念が、とらえようとすると、僕の頭の中で一つの姿ある体系に結晶するかわりに、白銀の光りに満ちた、というより白銀光そのものである空間にあとかたなく消えて行く。……磨きぬかれた刃金の光りにも似た光りの像が、僕の印象に残され、西洋の思想家の書物を読むのに馴れた僕らが、思想書から手に入れる習慣になった道具として使えるような観念はほとんど全く、あとをとどめない。恐らくそれは、ソクラテス以来、西洋では思想は、人間と人間の社会に関する配慮にもとづいて生み出されたのに、ここでは思惟はもっぱら宇宙の全体を関心の的としているのによるのだろう。つまりひとしく哲学的と言っても西洋の思想は道徳的であるのに対して、道元に現れた仏教の思惟はいちじるしく詩的なのだ。この比喩は、詩篇のうちの一句が、僕らの記憶にとどまるのは、その有効な意味のおかげで

I 透体脱落

はなく、美しさのおかげであり、又その存立は詩篇全体の有機的な、内的響きあいによって支えられており、その美しさすら、全体の響きあいによって磨きをかけられているのである以上、特にある一句が美しい句として僕らの記憶に鑄りこまれるのにはとかく偶然のおもむきがある、詩としてはむしろ偶発事である、われわれはそれを詩の必然を理解し、これに従って選ぶのではない、という点にまで、この比喩は拡張して用いることができるであろう。もっと拡大して用いることもできる。

詩の美しさに触れた心は、しばらくの間は、観照という言葉がむしろ適切な、その美しさによって触発されるミクロコスモスのようなその詩の構造に関する考察にさそい込まれて、容易には自分のしごとに、自分のためになる活動にもどろうとしない。美は人を沈黙させるというのの一つはそのことを指して言うのだが、道元の表現にもそういうところがある。

盤山寶積禪師云、心月孤円、光呑万象、光非照境、境亦非存、光境俱亡、復は何物。

いまいふところは、仏祖仏子かならず心月あり、月を心とせるがゆゑに、月にあらざれば心に
あらず、心にあらざる月なし。孤円といふは、虧闕せざるなり。兩三にあらざるを万象といふ。
万象これ月光にして万象にあらず、このゆゑに光呑万象なり。万象おのづから月光を吞尽せる
がゆゑに、光の光を吞却するを、光呑万象といふなり。たとへば月吞月なるべし、光吞月なる
べし。ここをもて光非照境、境亦非存と道取するなり。

(『第四十二都機』)

僕は『正法眼蔵』が僕に残す光それ自体であるような虚無、しかし意力の充満した美しい虚無の

感じにさそわれ、又それがいかに、一箇二箇三箇四箇の眞実な觀念を人に植えつけることを目的としたものでなく、もはや数えることも列挙することもできない、一にして全なる眞実を、目に見えるように現成せしめようとするところの形であるかを示す一例までにこの引用を行ったのだが、僕はこの文章の所在を確定するにも、空漠とした記憶の中をただよい、普通学生が大部の書物の中から改めて読み直したい個所を探すために用いる、あそこにこういうことが書かれていた、ここにはこういうことが書かれている、又あそこの色合いはこれこれ、この色合いはこれこれ、それゆえどこそこだろう、という、感覚乃至生理の支援をうけた論理的方法を全く用いることができずに、これが外れたら全く法がつかない、しかし迷うことの許されていない勘にたよってやったということとを白状するのは多分面白かろう。帳面に抜萃を作っておけばそんなことは経験せずですんだらうとひとは言うだろうか。僕としてはかなり特別な、この執筆心理学上の経験を、ひとは、僕の怠惰のせいにするだろうか。

僕は自分を億劫がりの怠けものでないとはけして言わないが、僕にとって、いつも対象の全体が僕の心の中にえがき出すそれ自身の姿をしっかりと損わずに見究め、見覚えておくことが大切なのだ。細部は、ただ確めるために、そこにもどって行く場所にすぎない。細部について確めた結果が、僕の全体についての印象のあやまっていたことを証明しなければ、僕は、一層の充実をかちえた思いで全体に帰る。僕は、こういう自分のやり方だけでは足りないということも知っている。

I 透体脱落

僕の書く文章を嵌木細工にたとえれば、それを構成する嵌木の一つ一つの切り口はかなり鈍く不整形で、その真実は論理よりも心理性によって持ち来されているとも形容できるだろう。だから僕が書くものは真実の取引市場の通貨となることができず、詩の領域にとどまっているということも分っている。学問の領域には入らないのだ。要するに僕の書くものの真は、主として僕との関係において成立ち、これを他の真実と対比しようとか、他にかわって準尺となろうとかいう意図のもとに作られたものではないのだが、しかし僕はこのような態度に出ぬかぎり、自分が文学をしているという気になれないのだ。僕には、あらかじめ公共財になることを予想して書かれた作品の多いことがかえって不満で、文学界の公共財たりうるか否かを偶然にかけるまでに、抵抗の磅礴する素材をいかに表現するかに主要な力をそそいだ作品こそ、文学が他の一切の文章とちがうゆえんを体現するものだとさえ主張したい。

僕の思考は余事にそれたが、僕の注意は『正法眼蔵』の上から離れなかった。僕はここでふたたびこの書物にもどったわけで、僕に凡百の文学作品を去って、『正法眼蔵』につくよう命じたもの一つが、このような自分の心事であったことを、僕は今言うことができる。

道元は仏現成というたった一つの、しかし全体であるところの、身心の差別、自他の境域、時処の境涯、というよりそういうものの存立の可能性そのものを超えた事柄を、いつ、どこでも語るうとしてゐる。それゆえ、引用しようと思う文章が全体のうちのどこにおかれているのかすぐには

思い出せないという事実は、むしろこの書物の本質に属するところで、僕らはこの書物の中では、個々の文章や説示がどのようにその言痛さという、本来人間のあらゆる道具のうちでこれ一つだけ質量を持たぬ道具である、言葉をもってした表現につきまとう最小限の物的性質をすら失い、まさにその言葉によって僕らの思考や表象力、というより表象する思考を触発し、方向づけ、はたらかしていながら、ただそういう作用のみに言葉の言葉らしい痕跡を残すだけで、すべての言語表現がいかに全体の、空華、一顆明珠、つまり仏現成の世界のうちに消えて行くかを見守る必要がある。透脱、脱落という思想は、もしこれを信じまいとしてかかれれば、随分異論をさしはさむ余地のある飲み込みがたい思想だが、それが、ここに、局部的表現と全体的思想との関係として成立っている有様を望見すればかなりの納得が行く。

『正法眼蔵』の中の個々の言語表現は、脱落してその中心思想に吸収され、それを現成、すなわち自己表現させるのに役立つのだ。いわば道元は質量を持たぬ道具としての言葉の性質を極度に利用した絶対的表現主義の立場に立っている、とも言えるのである。ここでは有限数という代りに両三、七箇八箇と言えばよく、又同じことを現しうる頭々面々という言葉が、連綿たる持続という意味にも用いられるのだ。万象これ月光という表現のおかげで、万象は万象でなくなり、従って月光が月光にはたらきかけることができるようになる。

と言って道元が全く素材なく彼の表現を、思考をすすめているというのではない。ちゃんと形あ

る言葉として残されている古仏の言葉が彼の素材である。

大体この『正法眼蔵』という書物は、『第一弁道話』から『第九十五八大人覺』に至るまで章の別があるにはあるが、後代の編纂である関係上、一つの章が他の章の論理的前提となつていたりとか、また他の章と呼応して段階をふんで全体に近づくというような企画は全然持つていない。そして各章に現れる道元はいつも道元の全部なのであるから、細部の説示や文章が、雄勁に語られていはするものの全体が与える感銘のうちに吞却されるのと同じように、各章の別も又仮りもので、それは中心思想に吞却されて、その境界を失うというようにできてゐる。実際各章は今も言ったように、事にふれ折にふれ、——特に、經文の文句や昔の禪僧の語録中の句をきっかけとして、道元がその確實さにより自分の思想——というより思考力と信念とをためしたという形をとつていて、章分けをなさしめたものは、道元の内的充実にはたらきかけた外来の偶発事だったわけである。そこでこの仏教的諸觀念の交響をその本当の豊かさにおいて、生きた多様の統一として、内的にとらえるためには、いな一冊の書物として読むためにさえ、たとえ仮りの状態であるにせよ、

おほよそ一切諸仏は、見釈迦牟尼仏・成釈迦牟尼仏するを成道作仏といふなり。

（『第六十一見仏』）

又、これと相呼応する、

いはゆる諸仏とは、釈迦牟尼仏なり、釈迦牟尼仏、これ即心是仏なり。過去現在未來の諸仏、

ともにほとけとなるときは、かならず釈迦牟尼仏となるなり、これ即心是仏なり。

〔第六即心是仏〕

という二句に現れた仏向上の宗教的体験を自分のうちに成立させていなくてはならない、あるいは少くともその成立の可能性を自分のうちに認めていなくてはならないと考えられる。なぜなら、これこそこの書の中心思想であり、全篇はすでにこの思想を獲得した人物の諸局面だから——それのみちびくための論証ではなく、すでにそこに達した人物の自己表現だからである。すべて宗教上の經典にはこの種の自分自身に対する疑いを一度は読者に起させる性格があるものだが、しかしここでは信仰をうるものが、教義上の最高の理想的存在に接近する意味をもつばかりでなく、そのものになるのだという考え方がなされていて、その疑いを一層重くしている。なぜならこの書を理解するためには僕は釈迦牟尼でなければならぬということになりうるからだ。ところで釈迦牟尼がもし人格的存在でないとしたら、このような仏向上の思想は一個の夢想に墮してしまい、道元の思想の持つつよい魅力の源の一つである意志の力が捉えられそこなうばかりか、ひいては「一人坐禪の功德」は「十方無量恆河沙数の諸仏ともにちからを上げまして、仏智慧をもて、しりきはめんとすといふとも、あへて(その)ほとりをうることあらじ」〔弁道話〕として、

……諸仏諸祖の行持によりて、われらが行持見成し、われらが大道通達するなり。われらが行持によりて、諸仏の行持見成し、諸仏の大道通達するなり。

〔第三十行持上〕

と説かれる「恁麼人」——現実の人間である修行者の器量まで取り抑えそくなってしまふだろう。道元にあつては古仏の言葉でさえ曲解されるのである。曲解さえあえてすることによつて、その意味を完璧ならしめることが庶期されているのだ。たとえば『第二十二仏性』において、まず、「仏言。欲^{セバ}知^{ラント}ニ仏性義^ヲ、当^ニ觀^スニ時節因縁^ヲ。時節若至^{シレバ}、仏性現前^ス」をかかげて彼がどう言うか、聞いてみるがいい。

いはゆる仏性をしらんとおもはば、しるべし、時節因縁これなり。時節若至といふは、すでに時節いたれり、なんの疑着すべきところかあらんとなり。

このように言われるのである。しかし今は彼の思想がいかに強烈な意志のうえに立つものか分れば十分である。それゆえ前にもどつて、そしてこの書物を単に宗教上の規範である以上に認識たらしめる上に、絶大な役割を果している脱落乃至透脱という觀念のありようを見ようと思う。

先師古仏、歳旦上堂曰、元正啓祚、万物咸新^{ナリ}、伏惟^{シテミレバ}大衆、梅開^{ハナリ}ニ早春^ニ。

(前略)その宗旨は、梅開に帯せられて万春早し。万春は梅裏一両の功德なり。一春なほよく万物を咸新ならしむ、万法を元正ならしむ。啓祚は眼睛正なり。万物といふは、過現來のみにあらず、威音王以前、乃至未來なり。無量無尽の過現來、ことごとく新なりといふがゆゑに、この新は新を脱落せり。このゆゑに伏惟大衆なり。伏惟大衆は恁麼なるがゆゑに。

さきに挙げられている天童山の如浄の言葉は、「明けましておめでとう。何もかもすっかり面目を一新しましたな。よく考えてみると、梅の花は早春に咲くものですな」というだけのことだろう。しかし古仏の言葉は、経巻と同じく、尽十方界を目前に現前せしめるもので、むなしいわけはない、心得がたいと言ってさしおいていいものではない、なんとしてでも心得ねばならぬものなのだ。まして、天童の如浄（二二二九年六十六歳にて没）は、在宋三年、無名の一典座によってすでに弁道と文字の真諦を明らかにした道元に、さらに釈迦牟尼仏より嫡々相伝五十代にわたる法統をうけるまでの修行をいとなませた正師である。その言葉が平凡だとしても、

しかあればとても、またふるきことばの、むなしかるべきにはあらず。いかにかこころうべき。こころえられずとて、さしおくべきにはあらねば、かならずこころうべしとおもふべし。

〔第九十一唯仏与仏〕

と、堅く信ぜねばならぬ。なぜなら、

みづからをしらんことをもとむるは、いけるものさだまれる心なり。しかあれども、まなこみづからをばみるものまれなり。ひとり仏のみこれをしれり。

（同右）

ここに仏というのはむろん釈迦牟尼ばかりではなく、悟道した一切の法統をつぐ僧がすべて仏なので、『正法眼蔵』九十五巻はすべてこれらの仏の言葉や行状の意味を徹底的に考え、またそれに啓示されんとする主観の強烈な努力のあとと云ってよく、それが華なき空に華をなさしめる底の表